

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 8 日現在

機関番号：32679

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26770040

研究課題名(和文) シューベルトの歌曲創作に友人の思想が与えた影響 J. H. ゼンの草稿を中心に

研究課題名(英文) Philosophical influences of Franz Schubert's friends on his music: With a focus on the manuscripts of Johann Senn

研究代表者

堀 朋平 (HORI, Tomohei)

武蔵野音楽大学・音楽学部・講師

研究者番号：10723398

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)： フランツ・シューベルトの音楽が、友人の思想にどれほど深く感化されて作られたものだったのかを明らかにできた。

具体的には、(1)ヨハン・ゼン(1792～1857年)の哲学的・美学的志向を、未公刊の草稿から読み解き、彼が往時のヘーゲルやシェリングといった哲学者の思想に取り組んでいたこと、(2)その成果を友人たちが、哲学・詩・音楽・絵画といった分野を越えて分かち合い、精神的営為の糧にしていたことが明らかになった。

研究成果の概要(英文)： This study proved that Franz Schubert's music was deeply influenced by the intellectual tenets of his friends, to be more precise;

(1) Philosophical thoughts of Johann Senn (1792-1857), one of the composer's best friends, are revealed through my research of his unpublished poems or treatises, a collection of the library in Innsbruck, (2) Music and text analysis made it clear that such thoughts were vividly discussed among the Schubert-circle interdisciplinarily and were incarnated in his Music.

研究分野：音楽学・美学

キーワード：ドイツ芸術歌曲 ロマン主義 音楽分析 親密性

## 1. 研究開始当初の背景

1980年代以降のシューベルト研究は、文化史学や精神分析などの知見を援用して斬新かつ広範な作曲家像を作り上げたが、それは一次資料の見直しをも迫るものだった。シューベルト作品番号(D)にその名が冠されたO.E.ドイッチュ編纂による資料集では体系的に排除された「美学的」内容をもつ友人たちの書簡が、読み解かれ始めたのである。

申請者はこの動向に掉さし、すでにシューベルトの親友2人(ヨハン・マイアホーファーとフランツ・ショーバー)の思想を一次資料に基づきながら読解し、その思想とシューベルトの音楽との密接な結びつきを証明してきた(以下、項目5「雑誌論文」で詳述)。

## 2. 研究の目的

本研究はこの路線を受け継ぎ、さらにもう一人の親友ヨハン・ゼン(1792~1857年)に焦点を当てる。第一に、彼が抱いていた思想を掘り下げ、その思想が他の友人たちと論議されていた様子を明らかにすること、第二に、その成果を総合的に作曲家研究に織り込むことでシューベルトの音楽がきわめて知的・哲学的な背景のうえに作られたものだった事実を証明することが、本研究の目的である。

## 3. 研究の方法

ゼンは自由主義的な思想信条ゆえ、カールスバート決議(1819年)以降いちだんと厳しさを増したウィーンの検閲状況のなか、1820年に逮捕・拘禁されて故郷のインスブルックに永久追放された。本研究は、同地の州立図書館(Tiroler Landesmuseum Ferdinandeum, Innsbruck)に遺されている草稿のうち、『ヘーゲル精神現象学の概念と意義』と題された研究ノートを中心に読み解く。

なお本草稿はドイツ語筆記体(Kurrent)で書かれているが、申請者はすでに2012年に訪れた際に類似資料を読み解いている。またゼンの文字は(マイアホーファーのような)癖がないうえに大きく明瞭であり、先行研究の蓄積もあるため、その筆跡は問題なく読解することができた。

## 4. 研究成果

本研究は、音楽分析を、詩人の伝記研究および思想史研究、またオーストリアの文化史学や歴史学による成果と積極的に交叉させることで、音楽の新たな読み方を提示しようという趨勢のうちにある。音楽にそもそも孕まれた無際限に豊かな意味の一端に触れる

ものでもあるゆえ、本研究は、これまで必ずしも参照・消化されてはこなかった欧米におけるシューベルト研究の最新動向を集約するばかりでなく、ほかの作曲家研究、また芸術研究一般においても折に触れて参照されるべき成果を提出しえたと考える。

申請者が2016年4月に公にした単著『フランツ・シューベルトの誕生 喪失と再生のオデュッセイ』(法政大学出版局)に集約された本研究の成果は、4点に要約される。

(1)シューベルトの親友ヨハン・ゼンが熱心な哲学徒であり、特にG.W.ヘーゲルの歴史観を糧に生きていたことが、草稿資料の読解により明らかになった。このヘーゲル志向は、J.W.シェリングやI.カントを斥けることによって意識的に育まれたものであることも明らかになった。シェリング的「啓示」やカント的「批判」ではなく、漸次的に未来の絶対精神へと至るヘーゲルの「歴史」に依拠しつつ、ゼンは、先の見えない暗澹たるフォアメルツの時代を生きようとしたのである。

ゼンのこうした志向は、シェリングに傾倒した友人ブルッフマンとの書簡論争からもたどることができる。前者の志向が、たとえばシューベルト歌曲《至福の世界》(D743)に、後者の志向が同じく《妹のあいさつ》(D762)に表れているように、その哲学論は友人にも確かに伝わり、作曲家の音楽づくりにも影響していたのである。

(2)上記は、たんに偶然の一回的な事実としてあるのではない。友人の精神的な傾向は、作曲家自身のそれとも呼応し、かつ作曲家の精神の時間的な変化とも深く関わっていたと考えられる。とくに、上記「3. 研究の方法」の冒頭で述べたように、ゼンは1820年に思想犯として逮捕されたが、これ以降、シューベルトの思想も、「啓蒙」をことほぐそれまでの傾向から、ノヴァーリス的「幻想」に頼るロマン主義的なものへと転向を見せたからだ。

ゼンは、1820年代もヘーゲルへの依拠をつづけた点で不変だったという違いはあるにせよ、友人の履歴は作曲家の創作キャリアとも呼応していたのである。この事実を、作曲家研究の内に総合的に織り込んだ点で、申請者のシューベルト伝は、これまでの研究にはない厚みと広がり具备了なものとなった。

(以下の二点は、本研究から発展的に得られた、いわば副産物的な成果である。)

(3)「シューベルトという作曲家は他者の思想にきわめて敏感であり、その所産は、友人の影響を顧慮することなしには論じることができない」という観点はきわめて重要であり、今後も掘り下げていかななくてはならない。そのさらなる一歩として、申請者は、シュ

ーベルトのオペラとしては最後の完成作である《フィエラプラス》の研究を行った(以下、項目5「学会発表」で詳述)。親友の兄ヨーゼフ・クーベルヴィーザーの台本になるこのオペラは、「オリエンタリズム」「パターンリズム」「父なるものからの若者の自立」といった、広範なテーマを扱っており、台本草稿の分析から、シューベルト自身もそれらのテーマに共振しつつ作品が仕上げられていった過程が明らかになった。

友人の思想からシューベルトの音楽を探求することは、当時の文化的な事象まで深く広く探求することを意味する。この意味で、本研究で得られた成果は、申請者の今後のさらなる研究方針を指し示してくれた。

(4)申請時の研究計画書「平成26年度」の項に記したように、本研究を補うプロジェクトとして、申請者は、西洋音楽の演奏論に関する書物の翻訳を並行して企ててきた。モーツァルトとベートーヴェンのピアノ作品を主題とするそれらの翻訳は、所期の目的どおり、下記項目5「図書」にて公表された。

これらの成果は、必ずしも本研究テーマと直接にかかわるものではないにせよ、今後シューベルトの器楽を作品分析・演奏研究するうえで、貴重な参照点となる。本研究は「友人の思想」というテーマであるゆえ、半ば必然的に歌曲というジャンルを主たる対象としてきたが、今後は、後期(1825年頃以降)のシューベルトがいかに器楽ジャンルでの躍進を見せたかについて探求したいと考えているから、この意味で、翻訳の成果は、申請者の今後の研究を準備してくれるものとなった。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

堀朋平「シューベルトと ロマン主義 の生成 マイアホーファーとシラーの美学的交叉をめぐって」『音楽学』60(2)、129-141 ページ、2015年3月(査読あり)

〔学会発表〕(計2件)

堀朋平「憧憬と諦念 転機としての《フィエラプラス》」日本音楽学会第67回全国大会、2016年11月12日。

堀朋平「シューベルトの宗教観 クレド楽章のテキスト処理を中心に」明治学院大学キリスト教研究所 公開研究会「キリスト教音楽の研究方法与今後の課題」、2015年2月28日(招待あり)

〔図書〕(計5件)

ハンス=ヨアヒム・ヒンリヒセン(著)、堀朋平(訳)『フランツ・シューベルト あるリアリストの音楽的肖像』アルテスパブリッシング、2017年4月、全192ページ。

E.& P. バドゥーラ=スコダ(著)、今井顕(監訳)、堀朋平・西田紘子(訳)『新版 モーツァルト 演奏法と解釈』音楽之友社、2016年4月、全672ページ。

堀朋平『フランツ・シューベルト の誕生 喪失と再生のオデュッセイ』法政大学出版局、2016年3月、全395ページ。

堀朋平『シューベルト 交響曲第7番口短調 d.759 未完成』ミニチュア・スコア (ogt256)音楽之友社、2015年8月(全120ページ[巻頭楽曲解説、iii~xviiiページ])

ハインリヒ・シェンカー(著)、西田紘子・堀朋平(訳)『ベートーヴェンのピアノ・ソナタ第28番 op.101 批判校訂版 分析・演奏・文献』音楽之友社、2015年5月、全248ページ。

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

#### 6. 研究組織

(1)研究代表者

堀朋平(HORI, Tomohei)  
武蔵野音楽大学・音楽学部・講師  
研究者番号：10723398

(2)研究分担者 なし

(3)連携研究者 なし

(4)研究協力者 なし